

龜山公園に添寫の詩碑

日田市 廣瀬 雄太（寄稿）

龜王城 曼秋蘆秋

龜王城墨

蘆の秋

賈日英准何處求

賈日の葉堆河岸が求めん

莫向長江談往事

長江に向つて徒悲を嘆すと莫れ

離聲月色不堪愁

離声月色 情へに愁えず

（秋の夕べ西教寺で遊ぶ）二首のみ

日記帳と開ケ原の戯へにて

○ 日田の古い話は豊西記や晝西讃話等で伝承されてき

左が昔、龜山公園内にあつた左衛門山曰隈城は文禄三年（一五九四）一月吉香吉の頃公科守代とて官木長次郎が着候し城を築き、町を城下に移して熙熙と呼び、続いて三年後に足利伊勢守（註高政）の臣、毛利隼人（註隼人）が更に修築を加え、五階の天守と三階の櫓を建てた——とあるから、四百年前はその偉容が

川面に映じていたことだらう。

○ 延長五年（一六〇〇）には有名な天下分け目と云われた開

ヶ原の戰である。

（註）水野新（註黒田）曰今度良嗣東徳川方について、中津城を

根拠として吉野諸侯を奉制して、これ又絲官（赤）の名族で朝鮮の役

以米落日の大友吉統（註吉統の子義統、秀吉から吉の字を賜つて（註）

を石垣城で城主を許せられた。此の城まで黒田軍へ絶大將として日

因人押し寄せて来たのが摺掛屋栗田出身で、栗山善助利安である。先に大原山着陣。（註）

○ 目標城を守る足利隼人で、軍馬のいななき族や城

の日本丸城、正月十日即ちの初遊一矢空氣に本筋が

列つてみれど同じ関東方と知り、成日黒田勢に明かされり。へ黒田軍は一年ばかり預け、後再び毛利守さる。

○ 深窓の詩は此の開ケ原の戦へさうもつたもので、盛衰

興亡の歎へ、戦の悲痛さ、人の世の空しさ秋の慨

ささ乱れ咲く蘆を眺めて追想し、今も言はず語らず流れづける川瀬に月の光に思いと起して切々と迫

るものがある。

○ さて当時から三百数十年の年月が流れて昭和の今日を

迎えたが、かつての山と水の清らかな郷も、蘆はおろ

か肩の上の鮭も姿を消し、水は少しく汚濁されてしまつた。

昭和四十五年秋、龜山公園へ添寫詩碑の建立を祝い、豆田所にて

（續前のことより）

日田は今夏、わが文叢会訪問の地、龜山公園へ上登つた恩へ出で新し。かが薄雲ゆかりの地で、散歩する老翁先生の詩碑が建つたという。それで広瀬氏が私心懐のこゝ詩（複数）とその解説、全文讀説にも紹介して思ひ、もうここに掲載させていただいた。但し讀者の便と思つて若干の註を加え、且つ佐伯のあれ／＼に開運のうすいと思われる部分を省略した。この詠礼をおめり／＼おだき／＼だ。

用筆 弘

○ 佐伯氏歴代位牌まつり

法古十一月二十五日 佐伯氏乃喜撰所蔵書等で、宮崎県北川村瀬川から三つの方が見えたが、若林節により前座供養が儀式に終せられた。集

參詫念写真の鏡庫裡で文叢を交わし、慈親の盆食を共にした。

年來は毎年位牌まつりとして、佐伯氏歴史追求会一席、盛んに健

古へと思ふ。

○ 中野脩岱先生の講演会

十一月廿八日（土曜）午後 佐吉御殿で

（註）佐伯氏の源流と題して私共の書き下し所を語つて下さった。

大神佐伯氏の源流

そして改めて猪方三郎惟深の勢力、実力について考えさせられ、「惟

深へ謀反説もうなづけるといふもの、盛會であつた。